

研究ノート

感情に着目した プロセスレコードについての一考察 ～精神看護学実習を通して～

A Study on the Process Records Focusing on Emotions
～ Through Psychiatric Nursing Practice ～

吉澤裕子

Hiroko YOSHIZAWA
旭川大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：プロセスレコード，感情，看護学生，精神看護学実習

抄 録

本研究は、精神看護学実習において、プロセスレコードを通して患者―看護師関係における看護学生の傾向を明らかにすることを目的とした。A大学の精神看護学講座におけるプロセスレコードは、患者の感情に着目して自己洞察を深められることを意図して取り組んでいる。そこで、精神看護学実習を終了した4年生28名の記録を対象に、プロセスレコードの内容を分析した。その結果、学生にとって関心事の方向が自分自身であり、患者の言動の背景に思いを寄せるに至っていない傾向が見出された。また、自己の内面への自覚に止まり、自責的になりやすく、傾聴する姿勢に至っていないことも明らかとなった。これらの自己課題の捉え方から、援助的介入に困難さを感じている学生の傾向が伺えた。

以上の結果から、心理的成長が追いついていないとも言える学生の特徴を踏まえたうえで、自己成長感を自覚できるような指導的介入の工夫が求められていることが考察される。

I. 緒 言

看護は、特殊な技術と広範囲にわたる科学的な知識を意図的に用いることを要求する実践である¹⁾。そこには創造力と実践力が求められる。それゆえ、看護基礎教育においては、理論と実践を融合させ系統立てながら持続的に発展させられるよう教え育むことが求められる。そのカリキュラムの中に、看護学実習が位置付けられている。

文部科学省(2020)は、看護職として求められる基本的な資質・能力の一つに、「コミュニケーション能力」を挙げている²⁾。看護は、人と人との相互作用において成り立っている。その対人関係場面を振り返る記録様式としてプロセスレコードがある。プロセスレコードは、人間関係に着目した記録であり、患者―看護師関係の発展やコミュニケーション技法の習得に大

変有用である³⁾と言われており、臨床現場や基礎教育などあらゆる場面で広く用いられている。中でも精神看護学実習では、対象理解において相互の関係性を振り返ることが重要な課題であり、プロセスレコードを活用する機会は多い。

看護学生を対象としたプロセスレコードの活用場面に関して、松丸ら(2021)は、「かかわり場面の意図的再現」「気になった場面の振り返り」「深める自己理解と他者理解」の3つのカテゴリに集約しており、プロセスレコードでの記述が自己の内面と向き合う機会となっている⁴⁾と報告している。また、多久島ら(2013)は、プロセスレコードの記載内容のうち学生の態度を5類型で分類した結果、調査的態度が最も多かった⁵⁾と報告している。すなわち、学生が自己を中心として展開している場面が多く、技術として真の傾聴が用いられていないというものである。これらのプロセスレ

コードの分析から、患者—看護師関係における学生の傾向として、コミュニケーションにおいて自己の内面と向き合いながらも、自己中心的傾向があり真の傾聴が用いられていないことが明らかである。このことから、コミュニケーションを苦手とする学生は、相手が表出した言動に囚われ、そこに反応してしまうと言える。すなわち、対象者と向き合うことに不安を抱えたまま感情的に反応してしまうがゆえに、相手の言動の背景にある心理面にフォーカスできず、相手の真意を読み取れないということになる。結果として、コミュニケーションへの苦手意識（分からなさ）に繋がるのではないかと考える。

そこで、対象理解を促すために、まず、相手の感情を客観的に捉える力を養い、その上で自己の傾向に気づくことを意図して、感情に焦点を充てたプロセスレコードの取り組みを試みた。本稿では、プロセスレコードの記載内容を分析し、学生の自己課題の捉え方における特徴を明らかにする。

【プロセスレコードの記載要領】

1) 本講座での学修目標・目的

自他の感情に焦点を当ててプロセスレコードに取り組む。具体的には、自分のこころの動きを分析し自己理解することを通して他者理解を深めるとともに、相手に及ぼした影響について吟味する。そこで、コミュニケーション技法の習得や対人関係の発展のための方法を学び自己課題を捉えることを目的とする。

2) プロセスレコード記録用紙の構成

相手（患者）とのかかわりから、以下の①～⑧の項目について記載する。

①患者のプロフィール

・どのような相手なのかを簡潔に記載する。

②日時と場面の説明

・時間、場所、環境などを簡潔に記載する。

③再構成を試みた理由

・どうしてこの場面を振り返りたいのか、相手の感情に着目しこの場面を振り返ることでどのような気づきを得たいのかを明確にする（「～させてしまった」など相手の負の感情に焦点を当てると良い）。

④患者（相手）の言動

・相手の発言、動作、表情、反応、周囲の状況、体の位置など、学生が観察し感じとったことを、発言内容を変えずに記入する。方言などもそのままよい。無言の時は「・・・」と表記する。

⑤私が感じたり考えたこと

・相手の言動や状況を受けて、自分がその時感じとつ

た感情や頭に浮かんだ考えをありのままに自分の言葉で記載する。特に、自分に生じた不安、戸惑い、焦り、違和感を見逃さない。

⑥私の言動

・「患者の言動」と、その時に生じた「私が感じたり考えたこと」を受けて、私が発した言葉と起こした行動を記載する。

⑦分析・評価

- ・相手とのかかわりの場面のプロセスを記録し、学生自身の分析・評価を行う欄である。従って、相手の言動に対しての分析・評価を目的としていない。
- ・再構成の理由を踏まえて、自分のどの言動や感じたり考えたことが相手の感情や言動を誘発したのか、鍵となるポイント（以下、キーポイント）のNo.を明示し分析・評価する。
- ・また、そのキーポイントをどのように変えると良好な関係を維持できるのか、具体的な言動を記入するとよい。

⑧自己評価およびこの場面からの学び

- ・自分が用いた防衛反応、行動パターン、コミュニケーションの傾向を明らかにする。
- ・この場面から、どのような気づきを得たか、場面の再構成とその自己評価を行ってみて、どのようなことを感じたか、コミュニケーションにおいて、大切なことは何かなど学んだことを記述する。

3) プロセスレコード取り組みまでの背景

実習以前に履修する授業で、プロセスレコードを記載する機会が組み込まれていた。コロナ禍のため、学内実習を実施し、その形式はロールプレイングとグループワークで構成した。まず、実施前に対象となる患者像と主訴を提示した上で、学生間で看護場面のロールプレイを展開した後、グループディスカッションを行った。そこでは主に、当事者でなければ分からない感情や思考について確認することを目的とした。最後に、ロールプレイングでの会話場面の録音を基にプロセスレコードを作成した。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象：A大学看護学科4年生に趣旨を説明し、研究協力に同意した28名の記録を調査対象とした。
2. 調査期間：2022年5月～9月（領域別実習後半の学生）
3. プロセスレコード項目ごとの分析調査の視点：前述の記載要領のうち、個人情報である①と②の項

目を除く残り6項目(③～⑧)に関して、調査の視点を明確にした。

- ③相手の負の感情に着目しているか。
- ④言語のみならず非言語を捉えているか。
- ⑤自己の内面に生じた思考や感情をありのまま記載できているか。
- ⑥自己の内面と言動にずれが生じていないか。
- ⑦自己の言動が相手に与えた影響についてキーポイントを捉えて分析しているか。
- ⑧自己洞察し、自己の課題を明確にできているか。

4. 分析方法：

各項目に記載されている内容の同質性を検討して概念化した。

5. 倫理的配慮：

プロセスレコードの記載は実習に組み込まれており、事前に研究の説明はしていない。学生全員の实習終了後に研究の目的と方法を説明し、記載済みのプロセスレコードを研究に用いることへの同意を求め、了承が得られたもののみ分析した。

Ⅲ. 研究結果

プロセスレコードに記載されている内容から、項目ごとに以下の傾向が明らかになった。

③再構成を試みた理由の傾向

相手の負の感情を捉えている者は50% (14名)だった。中でも、課題の意図を捉え適切に明記できている者は全体の25% (7名)に止まっていた。その他は、感情が記載されていなかったり(6名)、自身の反省になっていた(8名)。

④患者の言動の記載内容の傾向

75% (21名)が非言語の記入がなく、言語のみから相手の感情を推察しており、言葉の背景を捉えられていない傾向が顕著だった。その他、非言語の記入はあるものの、キーポイントとのずれが生じていたり(2名)、感情との結びつきが曖昧だった(5名)。

⑤私を感じたり考えたりしたことへの傾向

分析対象の50件のうち、受容的思考は16% (8件)に過ぎず、84%がコミュニケーションの形式や今後の展開、または相手からの評価に視点が向いていた(表1)。

表1 ⑤項目の分析結果

⑤私を感じたり考えたことへの傾向	50件
受容的傾向	8 (16.0%)
相手の言動内容よりコミュニケーションの形式に視点が向いている	9 (18.0%)
相手の言動内容ではなく相手との関係性に視点がある。	6 (12.0%)
自分のシナリオの中で展開しようとしている。	9 (18.0%)
相手の言動に納得するばかりで、そこから発展的思考になっていない	9 (18.0%)
自分の価値観(解釈)に基づき疑問を抱いており、相手の言葉の背景を考えられていない	9 (18.0%)

⑥キーポイントに該当する私の言動の傾向

主に、「受け止め(14.3%, 4名)」「思い込み・分かったつもり(17.9%, 5名)」「興味本位(25.0%, 7名)」「聞き出し(7.1%, 2名)」「問い詰め(21.4%, 6名)」「困惑(14.3%, 4名)」の6概念に分類できる。特に、「興味本位」と「聞き出し」および「問い詰め」を合わせると53.5%であり、自分が興味を持ったことや疑問に思ったことをストレートに問う傾向がみられた。

⑦分析・評価の傾向

28名中24名がキーポイントを捉えられていなかった。その中でも、場面全体の振り返りをしている者が5名(17.9%)、直後のディスカッションの内容を記載している者が2名(7.1%)いた。記入例を提示したう

えで記載ポイントを説明しているが、理解に至っていないと言える。主な分析・評価の傾向は、「思い込み」「自責的」「自己の正当化」の3概念に分類できる(表2)。「思い込み」では、自身の価値観での解釈からそんな気がするという思いが強く、分かったつもりによる評価であり根拠が明確になっていない。また、「自責的」は、上手く展開できず相手を苦しめてしまったという反省の念が強い傾向であり、「自己の正当化」は、上手くいかなかったのは、自分が緊張していたから、あるいは焦ってしまったからと理由付けし、自分を正当化する傾向がみられた。

⑧表現された自己の傾向

主に、「すべき思考」「興味本位」「思い込み」「自信のなさ」「緊張・焦り」の5概念に分類できる(表3)。

表 2 ⑦項目の分析結果

	⑦分析・評価の傾向
思い込み	苛立って子供に当たった理由や今後の不安を開けるタイミングで聞くことが出来ていない。
	励ましの言葉をかけようとしている。そこで、言葉に詰まり、(沈黙となり) 疲れさせてしまった。
	相手の気がかりなことの根本解決をしようとしている。
	不安について質問したが、答えづらい聴き方であり、今は(薬を) 飲めない状況でもあるため、聞かなくてもいい質問である。
	患者に対して辛いという言葉に着目して、辛いことに対して細かく聞きすぎ患者の言葉を詰まらせてしまった。
自責的	Hさんの気持ちの整理がついていないのに、解決しようとしてたくさんの質問をしてしまった。
	相手の返答に対して受け止めることができず、仕事のことについて聞いてしまっていた。
	キーワードを捉えることができなければ、困惑させてしまうことはなかった。
	嫌悪感を自覚させてしまった。
	事前にある情報から、相手についてアセスメントし、自分が椅子に座ることについては考えず受容することで、不快な思いをさせることはなかった。
自己の正当化	不安や悩みを聴き軽減させることを目的として訪室した。緊張していた。会話が続かないことに焦りを感じ患者の不安を軽減するためのかわりができなくなってしまっている。
	何か話さなければという緊張感に繋がってしまった。
	何か話さなければという気持ちからも、意味のない発言に繋がってしまった。

表 3 ⑧項目の分析結果

	⑧表現された自己の傾向
すべき思考	相手の言動の真意を深く考えずに自分本位に解決しようとしていた。
	一方的に問題を解決しようとする気持ちが強すぎている傾向がある。
	解決するにはどうしたらよいかという気持ちがあり、言葉の背景を読み取ろうとしていない。
	辛さにだけ視点をむけて、解決しなければならぬという思いで話を進めている。
興味本位	自分が聞きたいことが先行してしまっている。
	患者が話してくれたことを受け止めず聞き流す傾向がある。
	次から次へといろいろなことを聴いてしまっている。
思い込み	自分が思ったことがまるで合っているかのように決めつけてしまう傾向がある。
	相手の言葉を確認せず自分の考えで勝手に決めつけてしまう傾向がある。
	自分の価値観をもとに返答する傾向がある。
	相手の考えや気持ちを理解したつもりになっている。
自信のなさ	申し訳なさを感じたときには口癖のように謝ってしまう傾向がある。
	自分が傷つけてしまった気がするという思いが先行している。
	自分自身ダメな自分という感情が強く、他者の感情を考慮することが出来ていない。
緊張・焦り	上手く対話をしたい、失敗を避けたいという気持ちがある。
	緊張のあまり話の焦点を定めることができない傾向にある。
	緊張してしまい、会話が続かないことに焦りを感じている。
	緊張が強く、戸惑いから消極的で患者の抱えている悩みについて向き合えていない。
	余裕がなくなると早口になってしまい、相手の様子が見えなくなる。
	次に何を話せばよいかという考えに囚われてしまう傾向がある。
	返事を返さなければならぬという焦りから、考えずに発言している。

各概念の主な特徴として、「すべき思考」では、解決しようとする気持ちが強すぎて言葉の背景を読み取ろうとしていない。「興味本位」では、自分の中でシナリオを作り、次の展開を考えた結果として聞きたいことが先行している。「思い込み」では、自分の価値観（解釈）で相手の状況を決めつけて理解したつもりになっている。「自信のなさ」では、相手を傷つけてしまうのではないかと、自分はできないという思いが強く相手の感情を考えることが出来ていない。「緊張・焦り」では、失敗を避けたい・返事を返さなければならないなど、緊張と焦りから相手の様子が見えていないなどと記述している。

IV. 考 察

本研究が対象とした精神看護学実習では、コミュニケーション技法の習得や対人関係の発展のための方法を学び、自己課題を捉えることを目的に実践を行っている。記述されたプロセスレコードの内容を分析した結果、まず、学生にとって関心事の方向が自分自身であり、相手の言動の背景に思いを寄せるに至っていない傾向が見られた。その結果、相手は責められていると感じ、負の感情を抱くことになる。この学生の傾向においては、発達途上である思春期から青年期の自己中心性が考えられる。過剰な自意識が健全な自己対峙を阻み、結果として自己を客観的に捉えられず他者理解に繋がらないと言える。

次に、表現された自己の傾向をみると、5概念が抽出された。「すべき思考」「興味本位」「思い込み」の特徴は、相手の言動に注目しているが、相手の内面へは注目できていない。また、「自信のなさ」「緊張・焦り」の特徴は、自己の内面の自覚に止まっている。すなわち、学生の傾向として、傾聴する姿勢に至っていないと言える。そこでは、自分の対応が悪かったなど自責的になりやすく、さらに臨床に立つことへの萎縮も懸念される。

これらの自己課題の捉え方から、援助的介入に困難さを感じている学生の傾向が伺える。看護学生にとっては、実習ゆえに成績評価が伴う現実があり、正解を求めたり失敗を恐れたりするのは否定できない。笹川ら（2004）は、他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度（FNE）を作成⁶⁾している。また、平石（1993）は、他者からの評価が否定的である場合、それが自己を脅かすために自己像が定着せず安定しない⁷⁾と述べている。いずれも、他者からの否定的評価

が高いほど適応上の問題に結びつくことを示唆している。青年期の学生にとって、まさに中心となる環境が仲間や外集団に移行する時期であるが、他者評価を恐れることなく自己洞察力を培うことが対人援助職を目指す学生にとっての課題と言える。

心理的成長が追いついていないとも言える学生の特徴を踏まえた上で、実習において自己成長感を自覚できるように指導的介入の工夫が必要であろう。

V. 結 語

自己中心的であり、真の傾聴が用いられていない傾向がみられる看護学生に対して、他者との関係性を客観的に捉える力を養い、その上で自己の傾向に気づくことを意図して実践を行った。現実の患者を目の前にするのではなく、シナリオを基にしたロールプレイングであり、そのような状況の中で、目の前にいる相手の非言語を捉えた感情の焦点化という難しい課題であったと言える。

文 献

- 1) DIANE M. BILLINGS, JUDITH A. HALSTEAD / 奥宮 暁子, 小林美子, 佐々木順子監訳: TEACHING IN NURSING-A Guide for Faculty -, 一看護を教授すること-大学教員のためのガイドブック, 第4版, 医歯薬出版, 2014.
- 2) 文科省「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告 看護学実習ガイドライン」: 2020. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00260.html (2022 / 7 / 1)
- 3) 萱間真美, 稲垣中編: 精神看護学II 地域・臨床で活かすケア-対象者の力を引き出し支える-, 改訂第3版, 南江堂, 2022.
- 4) 松丸直美, 平山香代子, 松浦真理子: 臨地実習指導にけるプロセスレコードの活用に関する文献研究, 第51回日本看護学会論文集, 看護管理・看護教育, 271-274, 2021.
- 5) 多久島孝, 田中康子, 中原恵美, 羽田野花美, 山本勝則: 自己理解と他者理解を深める事例検討会の意義と教育的効果-患者との援助的関係形成能力の育成に向けて-, 保健科学研究誌, (12) 41-52, 2013.
- 6) 笹川智子, 金井嘉宏, 村中泰子, 鈴木伸一, 嶋田洋徳, 坂野雄二: 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み-項目反応理論による検討-, 行動療法研究, 30 (2) 87-98, 2004.
- 7) 平石賢二: 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II) -重要な他者からの評価との関連-, 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, (40) 99-125, 1993.